

## (1) 成果

- ・毎日、「挑戦・協力・発見」の振り返りを行ったことで、自分自身の目標について意識することができ、明日のめあてを考える手立てとなった。
- ・毎日、自分の良いところを仲間やスタッフからフィードバックしてもらった「All for One（一人のために）」の振り返りを行ったことで、自己存在感や仲間のために役立っているという実感を得ることができた。
- ・キャンプの様子を、取材協力していただいた群馬テレビのニュース番組で3回放映したり、その映像（YouTube）を本所のホームページ上で配信したりすることで、参加者の保護者等に頑張っている活動の様子を届けることができた。
- ・23名全員が総距離約50km、累積標高差約3,000mの9つの山を登頂することができた。
- ・メインプログラムである9つの山の登山に挑戦する中で、やり抜く力が高まる効果が見られた。

## (2) 課題

- ・自己肯定感を高めていくために、他者と協力する場面や自己と向き合う機会を増やすとともに、人の役に立つ、人から褒められる、感謝されるといった経験がたくさんできるような活動内容を検討し、それらの体験について毎日振り返ることで、次の活動に生かしていく。
- ・本事業で自己肯定感の教育効果が上がらなかった理由としては、チームの人たちと力を合わせて事に当たるという野外炊事やテント泊等の協同場面が足りなかったのではないかと考える。
- ・1か月後の保護者アンケート③にもある通り、個の目標や特性、実態を把握しながら支援を行う必要があるため、子供や保護者との面談、生活での声かけ、「振り返りの時間」の持ち方、指導者同士の情報共有の仕方を検討する。
- ・ボランティアの調査結果（自由記述）にもある通り、安全面の指導方法や生活面での指示の仕方など、子供たちとのコミュニケーションにおいて工夫していくことが必要なため、さらなる指導者同士の連携や声かけの仕方などを検討する。

## (3) 推進委員より（五十音順）

## 「子供たちの心や人間性をはぐくむ限界突破キャンプ」

國學院大学人間開発学部 准教授 青木康太郎 氏

推進委員の一人として、自己肯定感ややり抜く力の調査を担当させていただきました。残念ながらキャンプを直接見に行けなかったのですが、後日撮影した動画を見ると、仲間と励まし合いながら山頂に向かってがんばっている様子や日を追うごとにたくましくなっていく子供たちの姿が印象的で、限界突破キャンプを通じて子供たちの心や人間性が大きく成長したことがよく分かりました。キャンプは、自然、プログラム、人で構成されるといわれますが、今年の限界突破キャンプは、赤城山という豊かな自然に加え、考えられたプログラムデザイン、素敵なキャンパー、リーダー、スタッフなど、いい条件に恵まれたキャンプだったのではないかと思います。今後、次年度に向けて検討が始まると思いますが、来年はどういった限界突破キャンプになるのか、今からとても楽しみです。

## 「上毛三山制覇へ向けて」

群馬県立妙義青少年自然の家 社会教育主事 青山 裕也 氏

限界突破キャンプのスタートである「事前キャンプ」に参加しました。初めて会う仲間と1日過ごし、心と体が少しほぐれた様子が見られた中、これから始まる7泊8日の登山練習が2日目に行われました。当日は、あいにくの空模様で朝から雨が降っていました。しかし、迷うことなく赤城不動大滝へのトレッキングを決行しました。それができるのも、事前の実地調査やスタッフの情報共有など事前準備がしっかりできていたからだと思えます。「雨=中止」にするのではなく、雨天時のルートや安全確保を十分に行えば実施できることを改めて実感しました。それと同時に「次は天気の良い日に行ってみよう」という意欲も湧いてきました。

2020年度は、いよいよ「妙義」が舞台となります。上毛三山制覇のお手伝いができることを今から楽しみにしています。

## 「ピアによるさらなる学びへ」

群馬大学教育学部 准教授 岩瀧 大樹 氏

今年度は子供たちを支えるボランティアの成長という観点から関わらせていただきました。このキャンプは、来てくれた子供たち同士で協力し、助け合うことで「できる」という感覚を伸ばす貴重なものです。しかし、その体験をより有意義にさせているのが、子供たちにとってのお兄さん、お姉さんたちの関わりだといえます。

子供たちは、まさに「自分とは何か」という課題を少しずつ見つけ、模索しつつある段階にいます。自身で失敗や成功を繰り返すことは大切です。でも、身近なお兄さんやお姉さんたちの存在や奮闘は、彼らにとってかけがえのないモデルになったと確信しています。また、彼らもボランティアが様々なことに気づききっかけを与えてくれました。

今後も子供たち同士、そして子供たちとボランティアのピアでの学びが続くことを期待しています。